



薬害は終わっていない

週刊新潮のコラム「変見自在」がやっと中止になった。毎週読んでいたわけではないが、以前、この欄で「対象」となった事柄の事情を知る一人として、ホッとした。

2018年9月6日の同欄はタミフルとイレッサとHPVワクチンを取り上げていたが、その内容は根拠薄弱な情報で溢れていた。あまりの無茶苦茶振りに、新潮社へ反論をしたほうがいいのでは？と当事者や遺族に連絡しようと考えた。しかし、すでに誹謗中傷を受けてきている方々がさらにSNSなども使って攻撃されそうで、止めた。そのときの掲載記事は今も手元にある。

執筆者T氏はタミフルに関して「裁判官は馬鹿ではないから親は敗ける。」と言う。裁判官は馬鹿ではないどころか、A地裁では、製薬企業側が指摘したわけでも論じたわけでもない文言を判決文に記していた。「自宅では熱はちゃんと下がっていた」に対して、「熱がどの程度下がっていたかを示す客観的な証拠はない上、9年以上前の出来事について記憶が一部変容等している可能性も否定することはできない」と親の証言を退け、傷口に塩を塗りこんでいた。事故直後からずっと変わらず述べておられた話であり、歳月と共に風化などしていないことは傍聴していればわかる。

T氏は「上告の印紙代も出せなくなった破産原告もいた。」とも書いている。情報源は？HPVワクチンについても、イレッサについても、曲解だらけの文言の羅列にクラクラする。

こんな内容が「辛口コラム」と人気だったらしいが、「辛口」の使い方を間違っていないか？小説などを辛口批評する場合、相手を貶めたい、短所を指摘してやりたい、ではない。対象を読み込んだうえで、なぜそう評価するか、ではないだろうか？「変見自在」は、「偏見」「言いたい放題」でしかない。今回、作家の深沢潮^{うしお}さんが排外主義を助長するとして訴えたことでコラムが中止になり、安堵している。

裁判が終わっても、当事者や家族・遺族にとって薬害は続いている。次年度の短期シリーズで「薬害は終わっていない（仮題）」を予定、医学的観点での根拠ある解説はそれに譲る。（さ）